

コロナ禍における園内環境の変化

— 新入園児受け入れでの幼稚園年少組担任の取り組み —

Changes in the Kindergarten Environment during the COVID-19 Pandemic:
Teachers' Approaches to Accepting New Children in Younger Classes

徳田 多佳子*

Takako TOKUTA

要約 幼稚園の年少組担任5名を対象にコロナ禍のもとでの新入園児や保護者の観察からどのようなことを認識し、どのように保育に取り組んだかを検証するため半構造化面接を実施し、KJ法による分析を行った。その結果、シンボルマークとして「育」、「共」、「衛」がつけられ、その要素は「コロナ禍で制限を受けた保育環境の困難を工夫と協働で乗り切る（衛）」と「なかなか会えなくても年少児の保護者たちと速やかに信頼関係を築く（共）」とに関連があり、ともに「新入園児が集団生活を送るけなげな姿に愛しさを感じた（育）」を支えていることが明らかになった。制限のある状況下でのより良い取り組みのためには「共」と「衛」の視点をもちつつ、衛生管理を中心とした取り組みを協働して進めるための人的環境の整備と、衛生教育を進めるためにツールなどの物的環境の整備を進めることも有効であることが示唆された。

キーワード：コロナ禍の保育、幼稚園教諭、年少児、環境、KJ法

Abstract Semi-structured interviews were conducted with 5 kindergarten teachers of younger classes and those interviews were analyzed using the KJ method to determine what the teachers observed during the COVID-19 pandemic and how they actually took care of children. Results yielded three labels (“rearing,” “collaboration,” and “safeguarding”), and results also revealed a relationship between “overcome difficulties with caring for children due to restrictions during the COVID-19 pandemic through approaches and cooperation (safeguarding)” and “quickly gaining the trust of parents despite limited chances to meet them (collaboration).” Those elements engendered “affection for new children who adeptly adjust to group life (rearing).” Results also suggested that improvements in human factors for better hygiene from the perspectives of “collaboration” and “safeguarding” and improvements in physical factors through hygiene education are effective under the restrictions.

Key words : Teaching in kindergarten during the COVID-19 pandemic, Kindergarten teacher, Younger children, Environment, KJ-method

I. 問題と目的

2020年度は、新型コロナウイルス(COVID-19)の流行による緊急事態宣言の発令から始まった。幼稚園においても未曾有のパンデミックへの対応が求め

られることとなったが、新型コロナウイルスが未知の感染症であったことから、正式な対応策を決定するためには試行錯誤と時間が必要であった。しかしながら、一刻も早い園児の受け入れと教育活動を再開するためにも、各幼稚園や教諭が工夫して対応することが求められていた。

幼稚園における新型コロナウイルス感染症への対応は、他の学校種と同様に2020年6月に通知された「新型

* 学術研究員
Academic Research Fellow

コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン」や「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアルー『学校の新しい生活様式』ー」において指針が示されている。それらによると、手洗いや咳エチケット、換気、消毒やソーシャルディスタンスの確保といった感染経路を絶つための方法や、検温や健康観察表を用いて健康状態を把握することにより感染源を絶つこと、また運動・睡眠・食事により抵抗力を高めることが推奨されている。さらに「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」では、幼稚園において特に留意すべき事項が書かれており、感染症予防の必要性を理解してもらう工夫や遊びの際に接触を減らす工夫、保護者との連絡でも会話を減らす工夫が留意事項としてあげられている。^{1・2}

このような幼稚園や保育所における感染症の予防方法は、2009年に起きた新型インフルエンザAのパンデミックの際にも重要視された。和田の研究³では、保育施設に看護師などの専門職を配備することや、登園基準の明確化と仕組み作り、予防接種の強化、発症者の情報収集システムの構築を提言している。しかしながら新型コロナウイルスは、インタビュー実施時点でワクチンがなかったために予防接種が行えないことや、未知のウイルスのため明確な基準が作りにくいという特有の課題が生じている。また、保育所での看護師の配置は乳児保育を担うために行われているが、看護師が専門職として保育所全体の保健活動に関して責任を担うことは困難であると推測される。看護師に期待される関わりを担う専門職としては幼稚園では養護教諭が保健にあたるが、実際に配置されている幼稚園は少ないという⁴。北川はこのような現状の下、実際の保健活動を行う幼稚園教諭や保育士へ保健指導に関する教育を行うことも重要であり、特に手洗いを習慣にするための健康教育方法や手洗い環境整備の正しい知識の習得の教授改善が必要なことを報告している。

これらの知識の習得をふまえ、手洗いを習慣化させるために歌や遊戯を活用するといった現場での工夫の提案もある⁵。コロナ禍における工夫として、パソコンやタブレット端末、インターネットなどの情報通信技術を活用した教育も推奨されている。先行事例として、カリフォルニア州の私立幼稚園でオンライン保育が実施された事例が報告されている⁶。

保育をオンラインで行うことには、子どもが家庭においても保育・教育課程に基づいた教育が実践されることや、子どもの顔を見て様子が確認できること、さらには子どもの家庭での様子や、保護者も実施されているカリキュラム内容が分かるというメリットがある。また、コロナ禍における子育ては子どもだけでなく保護者への精神的な負担も大きいため、保護者の様子が確認できることもメリットとしてあげられた。しかし、オンライン保育を行うためには保護者と教諭が電子機器の使用に慣れておく必要があることや、家の中の掃除や身支度を整えることの負担、特定の時間にログインすることで生活リズムが崩れることやセキュリティの問題などがデメリットとしてあげられている。そのため現実的な取り組みとして、まずは保育現場での実際の取り組みを考えることが重要である。コロナ禍の工夫については、日本においても宮城県仙台市の保育現場での取り組みが資料として報告されている⁷。この事例では、専門職として看護師や養護教諭が配置される重要性和現実とのギャップや、消毒、マスク着用、換気が対応策として行われていることが報告されている。また情報通信技術(ICT)の活用として、動画配信やWebカメラを用いて保育中の様子を保護者へ配信することが行われていた。さらに、幼稚園における新型コロナウイルスへの対応としては感染予防だけでなく、保護者や行事への対応も重要である。仙台市の事例の動画配信は、保護者との情報共有を円滑に行えるようにする取り組みである。概ね全国的に行事の実施を断念する園が多かったが、その判断は各園に委ねられていたようである。このようにコロナ禍における幼稚園での対応は現場での判断が求められることが多く、その効果についても試行錯誤の段階である。

本研究は新年度、幼児を一斉に受け入れる幼稚園を対象に、年少組担任が行っているコロナ禍の取り組みについて調査した。年少組の担任教諭にとって、子どもたちを初めての集団生活に速やかに導入させることは重要な課題である。しかしながら2020年は1月から社会にコロナ不安が広がり、4月に緊急事態宣言が発令され2ヶ月入園が遅れた。このため新入園児が幼稚園での生活にスムーズに馴染めるかどうか危惧された。その状況をふまえ、年少組の担任教諭が1学期中の新入園児や保護者の観察からどのようなことを認識し、どのように保育に取り組

んだかを検証する。本研究により、幼稚園教育に制限が生じる特殊な状況下での取り組みのあり方を考える一助になることが期待される。なお方法は半構造化面接を行い、KJ法で検証・分析を行った。

II. 方法

対象者と調査園について

関東地方東部に位置する私立N幼稚園で、園長先生から年少組5クラスの担任教諭の紹介を受け、計5名(いずれも女性)がインタビューに参加した。Table 1に調査対象者の属性を示す。本園は園児数320名、教職員数25名の完全給食実施園である。園児は市内全域及び隣市から、父母の送迎や送迎バスを利用して通園している。2020年度の臨時休園と再開は、園長先生の判断で地元公立小学校に足並みを揃えた。進級児は5月25日(月)から男女別に1日おきの分散登園を開始し、新入園児は5月30日(土)に入園式を行い6月1日(月)から同様の登園が始まった。翌週6月8日(月)から全園児登園とし、この週は各クラス保育時間を1時間短縮して一斉に給食を開始した。第3週の6月15日(月)から、通常の保育が行われた。なおコロナ禍の保育様式の模索期で、調査の受け入れに応じた園は1園に留まった。インタビューの手続き

調査は半構造化面接の手法を取り、2020年8月～9月に実施した。面接では6月から1学期末までの、コロナ禍の保育を意識した自身の保育実践と取り組みに対する気持ちを尋ねた。発話内容はICレコーダーで記録され、インタビュー終了後に逐語録が作成された。面接総時間は4時間55分、1人あたりのインタビュー平均時間は58分、逐語録総字数は69435文字であった。

倫理的配慮

インタビューを開始する前に研究目的を口頭及び書面で説明し、発話内容の音声記録・筆記記録、及び研究への使用について全員から書面で同意を得た。

なお逐語録には個人名をアルファベットで表し、個人情報保護に配慮した。

分析方法の選択

上記5名のインタビューデータの分析には、川喜多二郎が考案したKJ法を用いた。KJ法はありのままの現象をデータとし、混沌とした現象の中から要素間の関係性を捉えてその構造を把握することができる^{8・9}。体系化が困難な質的分析法を一連の手続きとして秩序を立て、原場の声を当事者の視点に沿って理解する上で有効なものである。本研究の分析に最適であると判断した。なお分析の信憑性・妥当性を高めるために、KJ法の研修機関の指導者が行う2日間セミナーを受け、基礎的トレーニングを受けた。その上で質的研究の経験をもつ複数の研究者にスーパーバイズを受け、検討を行った。

分析手順

KJ法は、「ラベルづくり」→「グループ編成」→「図解化」→「叙述化」の4ステップから成る。具体的な手続きとしてまず「ラベルづくり」はインタビューの逐語録を一つの意味あるまとまりに細分化し、調査対象者のコロナ禍の年少組園児の入園からインタビュー当日までの取り組みのエッセンスを書き出し、元ラベルを作る作業である。次にその元ラベルを広げ、概念が近いラベル同士を合わせてグループを作る。さらにそれらのグループ同士を比べて類似性の高いものはまとめ一つのグループとし、グループの表札をつけてその元ラベルは表札の下に重ねクリップでとめる。その上で表札をつけたラベルの束を並べラベルを広げ、ラベル集めから表札づくりを繰り返しラベルの束が3枚程度になるまで統合する。これら一連の作業が「グループ編成」である。最終的につけられた表札に重ねられた束の関連性を考えながら、段落ごとにセットしていったラベルが分かるように空間配置し、線で囲み「鳥どり」をする。さらに鳥同士の関連性を示す関係記号を記

Table 1 Attributes of study participants

教諭名	年齢	担当組	園児数(男・女)	保育経験年数	年少組担任経験年数
L	20代	1組	21(10・11)	5年	5年
P	20代	2組	20(9・11)	2年	2年
Q	20代	3組	20(10・10)	2年	1年
X	20代	4組	21(10・11)	5年	3年
Z	20代	5組	20(10・10)	2年	1年

入する。また、それぞれの島を視覚的に感性や直感的理解を訴えるようなシンボルマークを入れる。これらの作業が「図解化」であり、最終的に図解化により分かったことを、文章にまとめる「叙述化」を行う。

本研究ではまず調査対象者5名について、対象者ごとに上記の手続きを行った。その後対象者ごとに抽出された最終段階の表札を元ラベルとし、同様の手順で統合し全体の要素を析出した。この際元ラベルは調査対象者LからZまで一人ひとりの実施した統合の元を辿れるように、それぞれの調査対象者のアルファベットを入れて通し番号をつけた。

Ⅲ. 結果

調査対象者5名の最上位の表札は、それぞれ3枚ずつの計15枚になった(Fig.1)。この15枚を元ラベルとして統合した結果、3つの表札に統合された。統合した下位の表札は『』で括り、それらをまと

めた中位ラベルは〔〕で表し、最上位の表札ラベルは【】で括った。なお教諭個別の語りは「」で表した。

1. コロナ禍の新入園児受け入れにおける担任教諭の取り組みの要素

(1) 【A.新入園児が集団生活を送るけなげな姿に愛しさを感じた】

担任教諭LからZのコロナ禍の新入園児受け入れにおける取り組みの要素の1つは、【A.新入園児が集団生活を送るけなげな姿に愛しさを感じた】であった。担任教諭たちは自粛期間中の家庭生活で子どもが経験する内容には差があるだろうと予測し、入園児がどのような発達状態にあるのか、さらにその子どもたちをどのように保育していけば良いか、不安を抱いていた。しかし『L-1 子どもたちはマスクでコミュニケーションに制約があったにも関わらず、敏感に担任の言葉を聞き取っていた』や『Z-13 入園

L-1 子どもたちはマスクでコミュニケーションに制約があったにも関わらず、敏感に担任の言葉を聞き取っていた	P-4 感染症予防の消毒は、園の先生みんなで徹底に行く	Q-7 いろんな試行錯誤(三密防止、効果的な感情伝達法など)は全員の先生で一緒に考える	X-10 みんなで楽しそうに遊ぶ姿を見て初期の心配が小さくなった	Z-13 入園初期に、既に生活面の基礎的なことを身につけている子が多かった
L-2 年中進級時に例年の子どもと経験の差が出ないようにするにはどうしたら良いか、常に考えている	P-5 子ども一人ひとりのために自らできる工夫はする	Q-8 個々の子どもで差はあるが、それは今年に限ったことではない	X-11 子どもが正しく理解しているか不安で、伝達内容が過剰になり反省する	Z-14 制限のある保育でどれだけ年少組の保育環境を整えていけるかは、自分を含む5人の先生次第だと思う
L-3 不測の事態と甘えることなく、学年の先生全員で年少組の今できることを考えたい	P-6 今できる連絡手段をとりつつも、保護者と早く直接会いたい	Q-9 子どもの様子はこまめに伝えて信頼関係を結ぶ	X-12 コロナ対策も他の先生たちに相談するのでも乗り切れる	Z-15 不安はクラスごとの行事や面談で解消する

Fig.1 Final labels for the 5 participants

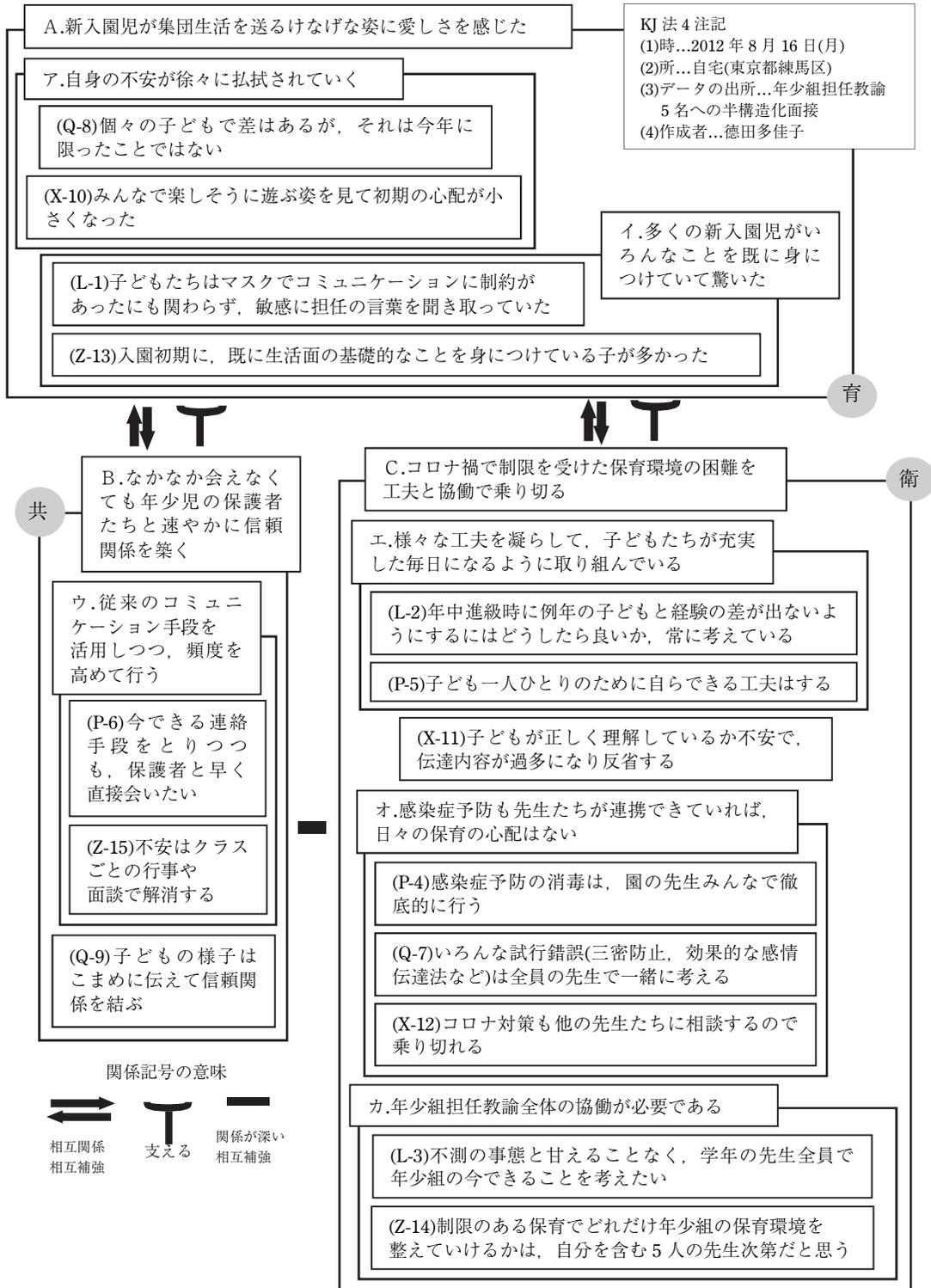


Fig. 2 The structure of the teachers' approaches to accepting new children during the COVID-19 pandemic

初期、生活面の基礎的なことを既に身につけている子が多かった』というように、[イ.多くの新入園児がいろんなことを既に身につけていて驚いた]ようである。特に手の洗い方について「すごいびっくりしたのは洗い方。正しい洗い方にみんな慣れているな、というのがありました。3歳で爪の中まで洗ったり、動画を観て覚えたという子がいたり(X教諭)」が示すように、予測されていた以上に子どもたちの生活習慣が既に身につけていると感じていた。保護者と離れ難くいつまでも泣くというよりも、「みんな積極的に幼稚園で遊ぼうとしていました(Q教諭)」と語り、[ア.自身の不安が徐々に払拭されていく]ことを感じていた。教諭自身も初めて経験する6月入園の年少児の現状が把握できず、不安を抱いて迎え入れていたが、最初の1週間を分散登園にしたことで一人ひとりに対応することが可能になり、予想を超えてスムーズな新年度の始まりだったようである。実際に子どもたちが大きな混乱もなく集団の中に入ったことや、水道栓やハサミの使い方といった物の操作や手洗いの上手さに驚いたという意見は、どの担任教諭からも聞かれた。また、「幼稚園に来てみんなと遊べること自体が“ヨッシャー!”みたいな感じ(X教諭)」や、「私が“外行くよ”と誘うと“イエー!”となるくらい積極的に楽しんでますね(P教諭)」というように、子どもが友だちと一緒に遊ぶことを楽しみにする様子が報告された。中には「外遊びに不安を感じる子どももいて、“中でみんなと遊びたい”と言って。お外には抵抗あってもお友だちとは遊びたいんですよね(P教諭)」と捉えられていた。コロナ禍の混乱の中で2カ月遅れの入園となったものの、遊びを中心に様々な活動を一所懸命取り組む園児の姿に担任教諭たちは【A.新入園児が集団生活を送るけなげな姿に愛しさを感じた】ようである。このように担任教諭は、コロナ禍の入園でもけなげに幼稚園生活を送る園児に愛しさをもって、大事に育てていこうとしていたことから、Aの島のシンボルマークは「育」とした。

(2) 【B.なかなか会えなくても年少児の保護者たちと速やかに信頼関係を築く】

2つ目の要素は【B.なかなか会えなくても年少児の保護者たちと速やかに信頼関係を築く】である。現代社会で少子化が進み、どこの家庭も一人っ子が多い。わが子の入園は保護者にとっても初めての経験であることが多く、親子共々不安を抱く。例年で

あれば1学期中に保育参観や保護者同伴の行事が計画され、担任を始めとした教諭たちと保護者の交流はそこで活発に行われる。しかし今年は全体行事が中止になり、特に園バスで通う子どもの場合、夏休み前の面談まで保護者と担任が直接会う機会がないままの家庭も多くあった。担任は『P-6 今できる連絡手段をとりつつも、保護者と早く直接会いたい』や『Z-15 不安はクラスごとの行事や面談で解消する』というように、対面での会話を望みながら、それができない時にどうすれば保護者の気持ちを聞き、自身の思いを伝えられるか[ウ.従来のコミュニケーション手段を活用しつつ、頻度を高めて行う]ことを考えていた。具体的には「特別に“こういうことは気をつけてほしいです”という要望はこちらにはなくて、きっと幼稚園を信頼してくださっているのかな、というのは保護者から感じます(S教諭)」としながらも、「ここで電話しておいた方が良さだろうと自分が思った時は連絡します。迷ったら(連絡帳に)書くか電話します(S教諭)」というように、少しでも子どもたちの様子で気になることがあった場合は、電話や連絡帳で状況を詳細に伝えていた。このように保護者への伝達、言わば人間関係を構築するための環境システムのツールとして、例年以上に電話や連絡帳を活用していた。そして『Q-9 子どもの様子はこまめに伝えて信頼関係を結ぶ』ように努め、【B.なかなか会えなくても、年少児の保護者たちと確実に信頼関係を築く】ことに力を注いでいた。このように担任教諭は、保護者との関係においてコロナ禍でそのコミュニケーションに制限があったものの、工夫をして保育者と共に保育に取り組もうとしていたことから、Bの島のシンボルマークは「共」とした。

(3) 【C.コロナ禍で制限を受けた保育環境の困難を工夫と協働で乗り切る】

3つ目の要素は【C.コロナ禍で制限を受けた保育環境の困難を工夫と協働で乗り切る】である。この要素は担任の個人的な工夫を示す内容と、園全体で行う内容に分けられた。個人の工夫としては『L-2 年中進級時に例年の子どもと経験の差が出ないようにするにはどうしたら良いか、常に考えている』というように、[エ.様々な工夫を凝らして子どもたちが充実した毎日になるように取り組んでいる]ことである。「今年度がこんな感じで進んで、活動は制限、行事も縮小。子どもも私たちも、だらけようと

思えばいくらでもだらけられると思います。できることをちゃんと考えないと、あっという間に過ぎていく。きっとそうなりますね(L 教諭)」というように、担任教諭が年少の1年間で子どもたちが身につけることを俯瞰して捉えていた。

ここでコロナ禍により行われるようになった担任教諭の、具体的な取り組みを3例あげる。1つ目は給食配膳時の工夫である。「食べるためにマスクを取って待っている時にオルゴールの曲を小さくかけて。歌詞がついていないので歌うこともなくて。“あ、これは〇〇だ!”とか言ったりして(Z 教諭)」と、会話が多くなる給食中のおしゃべりを控える取り組みである。次は自身の保育技術を高めることで子どもの興味を惹きつけ、欲求を満たそうとする取り組みである。「折り紙が好きな子がとっても多いので、自宅にいるんなものを調べて折れるように練習しているんです(Q 教諭)」との話が聞かれた。また「声のトーンを変えたりボディランゲージを大きくしたり(X 教諭)」、「あと、マスクをしていると表情が隠れて何か怖いじゃないですか。で、私、手作りのかわいいマスクをつけるようになりました。登園して先生がかわいいマスクをつけていると、子どもたちも“今日は水玉のマスクだね”とか、それで話しかけてくれたりしたので。ちょっと絵柄や色にこだわって、子どもに怖い印象をもたれないように気をつけています(X 教諭)」という取り組みもあった。子どもにとっての人的環境である教諭自身が、意思伝達の際の工夫やマスクの絵柄に対する工夫を行っていることが語られた。このように個々の担任教諭が[E.様々な工夫を凝らして、子どもたちが充実した毎日になるように取り組んでいる]ことが示された。しかし『X-11 子どもが正しく理解しているか不安で、伝達内容が過多になり反省する』と、年少児だからこそどんなことでも順を追って丁寧に教えたいという願いから、子どもたちに伝えることが詰まってしまったと反省する意見も聞かれた。一方全体で行っている取り組みとしては『Q-7 いろんな試行錯誤(三密防止、効果的な感情伝達法など)は全員の先生で一緒に考える』との報告があり「オ.感染症予防も先生たちが連携できていれば、日々の保育の心配はない」と考えられていた。そして[C.年少組担任教諭全体の協働が必要である]と認識していた。具体的には『Z-14 制限のある保育でどれだけ年少組の保育環境を整えていけるかは、自

分を含む5人の先生次第だと思う』のような内容であった。その具体例として、「保育が始まって間もない頃はなるべく折り紙とかをいっぱい用意して、おうちでやってたようなことがたくさんできるようにしていました。他の先生たちといろいろ考えたのですが、子どもたちの遊びは慣れてることの方が安心して取り組めるとなったので(S 教諭)」とあるように、折り紙などの手近な遊びの素材が有効と判断したようである。また年少組の保育環境として「プラレールとか普段は出してないんですけども、今年は出したんです。ぬいぐるみとかも、先生たちで洗ったり天日干しをして出して。そうすると、子どもたちもおもちゃがあることの安心感があるんですね。おもちゃって大事なんだなって、あらためて感じましたね。最初の頃は泣いている子がぬいぐるみを1つ、好きなものを見つけると“この子が大好きだから安心”と思うのか泣かなくなって。いっぱい出すのも善し悪しあるでしょうけれど(Z 教諭)」との報告が確認された。コロナ禍のもとで年少児が園生活に馴染む導入期間に、身近なおもちゃによる遊びの有効性と重要性の再認識が、担任教諭間でなされていた。この様に保育者たちは、【C.コロナ禍で制限を受けた保育環境の困難を工夫と協働で乗り切る】ことに力を注いでおり、コロナ禍から新入園児を大切にかばい、衛る姿勢がみられたことからシンボルマークは「衛」とした。

2. 各要素間の関係性

コロナ禍の保育には「共」=【B.なかなか会えなくても年少児の保護者たちと速やかに信頼関係を築く】という保護者と信頼関係を構築するための取り組みと、「衛」=【C.コロナ禍で制限を受けた保育環境の困難を工夫と協働で乗り切る】という個々の担任教諭の工夫や園全体で協働する取り組みが、新入園児の生活である「育」=【A.新入園児が集団生活を送るけなげな姿に愛しさを感じた】を支えていた。それとともに、新入園児がコロナ禍でもけなげに頑張る様子は上述の2つの取り組みをさらに強化する原動力ともなり、相互作用の関係にあった(Fig.2)。

IV. 考察

1. コロナ禍での保育の現場における取り組み

(1) 衛生管理に対する取り組み

衛生管理は、園全体での取り組みが不可避であ

る。特にコロナ禍は未曾有の経験であり、例えば手指の消毒の徹底などは、通常の清潔の維持を超えて前例のない衛生管理が求められる中、教諭たちが試行錯誤を繰り返しながら取り組みを行っていることが報告された。また初めて集団生活に入る年少組ゆえの保育環境の整備もあり、年少組担任教諭全員での協働も必要と認識されている。このように衛生管理に対する取り組みは、園全体の教諭の協働と年少組の担任教諭の協働という二重の人的環境の中で取り組む必要が示唆された。発達段階から考えると幼稚園での学年が異なるとその認知能力に大きな違いがあり、個々の学年でその対応は大きく変わってくると推測される。年少組の取り組みを捉えることは、意味あることと考えられる。

(2)衛生教育に関する取り組み

例年より2か月遅れの入園となったものの、予測していたよりも子どもたちは衛生観念をよく理解していたようである。しかしながらコロナ禍での保育の場において、幼稚園としての衛生教育に関する取り組みは不可避であり、担任教諭たちは衛生教育に対しても様々な工夫を試みていた。集団生活を初めて経験する子どもたちが、担任の言葉による教示を正確に理解し実行するには時間を要する。衛生教育の場合、一時的な言葉そのものの意味理解ではなく、言葉を行動に還元しその行動の重要性を理解して継続的にその行動が維持されなければならない。さらにコロナ禍において衛生管理は急務であり、衛生教育は速やかに正確に行われる必要がある。ここに担任教諭の取り組みの工夫が求められる。本調査の担任教諭たちは、例えば食事の時に子どもたちに小さな音楽に耳を傾けさせて黙食を促すなど、言葉による教示に頼らない衛生管理の工夫を行っていた。この衛生教育に関する取り組みは、言い換えれば衛生教育環境の工夫といえるであろう。

(3)集団生活に慣れるための遊びに対する取り組み

コロナ禍において衛生面ばかりが強調される傾向があるが、新学期のスタートが遅れたことによって生じる弊害についても着目する必要がある。本調査においてもコロナ禍で例年よりも入園の時期が遅れたために、幼稚園の生活への導入に困難が生じるのではないかと危惧されていた。このため子どもが幼稚園生活に馴染めるように、遊びに対する工夫が行われていた。その一つは、これまでは特に使っていなかったぬいぐるみを整えるなど、おもちゃの用意

である。ここでも衛生管理は徹底され、年少組の担任教諭たちが一緒におもちゃの消毒に取り組んでいる。家庭での生活を例年よりも2か月長く経験して入園した子どもたちは、その生活環境の違いに戸惑うのではないかと危惧して行われた工夫である。ぬいぐるみという子どもが和むおもちゃの環境整備をすることで、園生活に支障なく導入を計ろうとする意図があった。実際は危惧していたほどの問題はなかったという認識ではあったが、その効果について言及されており、このようなおもちゃの環境を整えることに一定の効果があったことが示された。また身近な遊びでも、手作業を通してコミュニケーションが期待できる遊びのバリエーションを自主的に習得する工夫が試みられていた。折り紙遊びはその一例である。このように既存の遊びを深め一緒に遊ぶという行動は、子どもたちの興味関心を惹き、新生活への導入、引いては信頼関係の構築にもつながったであろう。

(4)マスク着用に対する取り組み

発達段階において言語能力が完成途中にある幼児に対し、非言語的コミュニケーションは重要な役割をもつ。しかしながらコロナ禍ではマスクの着用が必須であり、口元を含み顔の半分以上が隠れるために、マスク無しの状態よりも表情を読み取りにくい。この問題を緩和する工夫として、「手作りのかわいいマスク」をつける試みが報告されていた。マスク着用は口の表情が読み取れない分無表情に近く、ともすると「怖い」印象を与える可能性がある。しかし子ども好みのかわいいマスクをつけることで教諭に対して親近感が増すと推測され、効果的な工夫であると考えられる。また付随的にそのマスクを通じて会話が広がり、よりスムーズに信頼関係が築かれたり、子どものマスクに対する抵抗感が弱まったりすることも期待される。マスクを環境とするならば、保育現場における物的環境の一つとして捉えることができ、これは上述した衛生管理、衛生教育、幼稚園生活への導入を効果的に行える環境整備であることが示唆された。

2. コロナ禍での保護者との信頼関係構築に向けての取り組み

多くの行事や面談の機会が制限され、保護者との信頼関係を築く機会が減少し、担任教諭の不安は大きい。同様に保護者の側も例年にない幼稚園の状

況や、コロナ予防の実態に対する不確実な情報の氾濫等が相まって、不安は増すばかりである。これを補うために担任教諭は従来のコミュニケーション手段を活用しつつ、頻度を高めることで信頼関係の構築に努めていた。接触回数が多いと好感度も上がり信頼度が増すため、このような取り組みは有効な方策であろう。感染予防の状況下において通信情報網を活用したメールやチャット、対面式のテレビ電話など、非接触のコミュニケーションツールを積極的に活用する環境整備が重要であると考えられる。しかし家庭によってはパソコン関係の整備は負担になったり、操作のスキルにもばらつきがあると推測され、導入の際は十分に留意する必要があると思われる。コミュニケーション手段の準備は、いつでも取り掛かることができる。その整備や保護者との情報共有など、システマチックな環境整備を常日頃から進めておくことが必要と考えられる。

3. 幼児教育の基礎・基盤の重要性を再認識

コロナ禍において例年よりも保育に注意を払わざるを得ない状況になった結果、担任教諭は改めて幼児教育の基礎・基盤の重要性について認識を深めていた。例えば幼児にとっての集団生活や他者との遊び、コミュニケーション、おもちゃの役割、手遊びの重要性の再認識である。加えて衛生概念を含めた衛生教育や衛生管理についても、単に清潔にするということだけでなく、感染予防という重要な目的を認識するに至っていた。また年度の期間が短縮されたことで、従来のスケジュールをできるだけこなすことが必要になり、必然的に1年の全体を見通すことが求められることとなった。すなわちこれまでは「例年通り」という前例があったが、コロナ禍においてはそれがなく、結果的に全体を見通したスケジュールを自分たちで立てることが必要となり、効果的なスケジュールのあり方を再認識する機会となったようである。同様に、保護者とのコミュニケーションも制限を受けたことで、その重要性が認識されていた。さらに2か月遅れの入園で、家庭教育の相違により生じる可能性がある個人差や成長度合いについて、担任教諭は調整に着目していることが明らかになった。これらについては本来から留意すべき点であるが、コロナ禍の状況においてはことさら注意深く検討されており、これもまた幼児教育の基礎・基盤の重要性を再認識しているといえるで

あろう。

4. 幼稚園での取り組みと保護者への取り組みが支える新入園児の生活

コロナ禍の困難な状況下に工夫ある取り組みで打破しようとする担任教諭の努力は、頑張る新入園児に反映され、それを受けて教諭はさらなる努力を重ねようとする動的な関係が生じていたといえる。また保護者との信頼関係の構築は、保護者とのコミュニケーションを通して家庭環境の整備の一環を幼稚園や担任が担っているとも考えられる。言い換えれば物的環境と人的環境の両面において、幼稚園の環境整備と家庭環境の整備は担任教諭の取り組みで関連し合い、ともに子どもの生活を支え、また頑張る子どもの姿を原動力にして向上していく関係にあったと捉えることができる。

5. より良い環境整備と「衛」と「共」の視点

コロナ禍での制限のある新入園児の幼稚園生活において担任教諭と幼稚園の取り組みは、言うなれば環境整備であった。その環境整備の方向は、大きく物的環境と人的環境の整備であることが示唆された。例えば2か月遅れの導入をスムーズにするためのおもちゃの準備とその消毒、非言語コミュニケーションが有効な発達段階の新入園児たちに対し、それができない制約を子どもたちが好むマスクの準備や黙食を促すための小さな音量の音楽を流す試み、また保護者とコミュニケーションをとるための頻繁なツールの活用などは、物的環境の整備に当たる。一方感染予防のためにすべきことを試行錯誤しながら幼稚園全体で協働して取り組むことや、保護者と密に連絡を取り合い家庭と協働する取り組みは人的環境の整備として捉えることができる。これらの環境は個々の教諭たちの工夫や努力の積み重ねから成り立っている。そしてこれらの工夫に至る努力の源は子どもたちの笑顔であり、その結果としての環境整備、そしてその先に生まれるのもまた、子どもたちの笑顔である。これらは相互に作用し合っているが、同じ地点でのループ的な作用ではなく螺旋状に向上する作用であろう。個々の担任教諭の工夫について、語りでは経験からその工夫に至ったことが述べられており、前述したように結果として環境の整備につながっていた。経験は重要な資源であるが、そのみに頼った工夫は直感的な工夫となりかねな

い。経験年数の違いから、工夫の度合いが異なる可能性もある。経験から考えた工夫のその先に、環境整備まで視野に入れることが重要ではないだろうか。

本調査の語りを KJ 法で分析した結果、工夫までを取り組みと考えるならば「衛」と「共」に分類される取り組みが明らかになった。しかし別の次元として、物的環境と人的環境の整備に結びつく取り組みも示唆された。コロナ禍のような感染予防のための制限を受けた状況下で新入園児へのより良い取り組みを効果的に考える際には、このような異なる 2 軸を想定して考えることは 1 つの示唆を与えるであろう。

V. おわりに

2021 年 12 月現在、新型コロナウイルス感染症はワクチン接種が普及してきたものの治療薬は概ね開発途中である。引き続き保育も三密を避けながら衛生面の徹底が行われており、こうした状況はまだしばらく続くであろう。調査時点の新入園児たちは、2022 年春、年長組に進級する。調査園は日々の感染症対策が功を奏し、クラスターは発生していない。園長先生に今年度の年中児と例年の年中児についての差異を尋ねたところ、発達や生活態度の大きな違いは認められなかった。しかし担任教諭の中には、今の年中児の遊びについて「例年より室内遊びが上手く、特にままごとに手洗いをを行う場面が頻出する」、「鉄棒遊びをあまり行わない」など、コロナ禍特有の生活様式が影響しているのではないかと思われる意見があるという。今後もこうした情勢下での教諭と園児の関わりについて、関心を寄せていきたいと思う。

引用参考文献

1. 文部科学省：新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン(2020) https://www.mext.go.jp/content/20210219-mxt_syoto01-000007775.pdf (閲覧日 2021.4.1)
2. 文部科学省：学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアルー学校の新しい生活様式ー (2020) https://www.mext.go.jp/content/20201203-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf (閲覧日 2021.4.1)
3. 和田紀之：幼稚園・保育園における感染症対策、小児感染免疫, 23, 1, 35-42 (2011)
4. 北川節子：文献を通してみる保育所・幼保連携型認定こども園・幼稚園における保健活動の現状と課題, 金沢星稜大学人間科学研究, 11, 1, 1-8 (2017)
5. 大見広規・鈴木文明・吉川由希子・望月吉勝：保育所・幼稚園・認定こども園等の施設および保育士・幼稚園教諭養成校における感染症予防に関する研究, 小児保健研究, 71, 92-100 (2012)
6. 吉田貴子・岩本茉莉：コロナ禍における保育の果たす役割ーカリフォルニア州私立幼稚園におけるオンライン保育をてがかりにー, 国際研究論叢大阪国際大学紀要, 34, 1, 73-82 (2020)
7. 小田幹雄・橋浦孝明：宮城県仙台市における保育現場の新型コロナウイルス感染症対策の現状について(第1報), 羽陽学園短期大学紀要, 11, 3, 33-50 (2021)
8. 川喜多二郎：続・発想法, 中央公論社, 48-105 (1970)
9. 川喜多二郎：KJ 法：混沌をして語らしめる, 中央公論社, 226-230 (1986)